

第 23 回講演会

日時：平成 30 年 8 月 9 日（木）15：00～17：00

会場：熊本市役所 14 階大ホール

『歴史を観る目・辿る道』

佐賀女子短期大学名誉教授 高島 忠平 氏

<講師プロフィール>

昭和 39 年熊本大学法文学部（東洋史専攻）卒業。奈良国立文化財研究所文部技官、佐賀県教育委員会勤務。文化財調査係長、吉野ヶ里遺跡保存対策室長、副教育長、佐賀女子短期大学教授、同短大学長、学校法人旭学園理事長などを歴任。

永年にわたり吉野ヶ里遺跡の発掘調査・保存・活用に取り組み「ミスター吉野ヶ里」とも呼ばれる。

著書に『日本通史 古代 I 吉野ヶ里』（岩波書店）、『縄文の宇宙、弥生の世界』（共著：角川書店）、『研究最前線邪馬台国』（一部執筆・編集：朝日新聞出版）など

1. 歴史とは何か



みなさんこんにちは。ただいま紹介にあずかりました高島です。紹介にありましたように、私も今から 52 年前まで熊本大学に在籍いたしまして、落第をしてしまい普通の学生よりも一年長くおりました。熊本大学には、やっとのことで入学したようであります。卒業するときも単位が足りずに何とか先生に頼み込んで辛うじて卒業しました。ただ、一年遅れたことで、奈良国立文化研究所に就職が決まりました。おそらくそれが一年早くても一年遅くても、そういう機会はなかったのですけれども、幸い就職が出来たいきさつがあります。私はつくづく自分の人生をふりかえると、行き当たりばったりというのを続けてきたようです。今日の話の中にも出てきますが、吉野ヶ里遺跡との出会いも、そうした「行き当たりばったり」が支えたものだと思います。今日は、蓑茂所長から難しいテーマをいただきました。どのようなお話をしようかと実は悩んでいましたが、常々自分が考えていることを、ここで話させていただけたらと思います。「歴史を見る目、辿る道」というテーマですので、「歴史とは何か」という難しい話から入りたいと思います。イギリスの世界的な有名な歴史学者のアーノルド・トインビーは、本当はイギリスの歴史しかやって

いなかった人ですが、実際は考古学、そして大学では古代史を教えておられた方です。第 1 次大戦の世界的争乱のなかで、自分のやるべき歴史学の道というものを、改めて感じとられたようです。それが最初に書いてありますが、「われわれは歴史の中にいる」という言葉です。常に何でもなし生活の中で、みなさんも未来に向かって動く歴史の中にいる存在であることを、トインビーは自覚して、世界的な歴史学者になったわけです。日本の歴史にも深い関心を持っておられた方です。『歴史とは何か』という書物も書かれていますが、トインビーが歴史学をより進めることにたった歴史に対する認識を初めにみなさんに説明させていただきました。

さて人類誕生から 500 万年といわれています。もっと古いという方もいますが、まだまだ人類発祥の謎は本当の意味では解決できていません。おそらく、みなさんも人類の最初の頃の人骨や痕跡の調査が現在の南アフリカで進められていることはマスメディア等でご周知のことかと思えます。なぜ南アフリカなのかということですが、実は人間にとって一番身近な動物がいるわけで、チンパンジーやボノボといった動物の遺伝子は、かなり人間と共有する部分が大きいわけです。ですから、人類史的にも類人猿は人類と最も近い関係にあり、こうしたチンパンジーやボノボなどの類人猿がヒトと分岐したというのは、おそらくアフリカであるというのが、現在の研究者の一致した意見です。実際に南アフリカの地域で最も古い人類の人骨が発見されて、そこを対象に人類の発祥を明らかにすべく、研究者が発掘に現在も挑んでいるということです。約 500 万年というのは本当に大雑把ですが、地球誕生の 45 億年から見ると、わずかな年月であります。その間、人類は森を伐り開き、村をつくり、さらに都市をつくり、より快適な生活を求めてきたと思います。その結果、地球が深刻なダメージを受けつつあるということは、みなさんもこの夏を体験

して感じられていることであろうと思います。あるいは大きな災害が起きるのも、こうした地球の生態のバランスが大きく崩れていて、それに人類が負った役割というのもあったかと思います。

アメリカの科学者をはじめとした様々な専門家たちが、地球にダメージを与えている人類がこの地球からいなくなったら地球はどうなるのか？それで地球は救われるのか？ということを、リアルなCGでシミュレーションしました。「人類消滅1日目」から、いろいろなことが書かれています。一つずつ、みなさんも想像していただければ分かると思います。「人類消滅1日目」から、まず訪れる変化ですが、明るかった町の灯りが突然消える、電気が止まってしまう、それがどういうことを引き起こすかということは、みなさんもよくお分かりかと思いますが、原発はどうなるのか、ということはシミュレーションには入っていませんでした。原発は、ご存知のように福島原発のように放置されると、メルトダウンが起きて地球環境に壊滅的な影響を与えることが予想されますが、これがシミュレーションの中に入っていないのは疑問に思います。多分、世界の原発が維持管理されなければメルトダウンすることは明らかで、数百はあるかと思いますが、地球環境に大変な影響を与えようと思います。

「そして人類消滅1万年後」ですが、人間がいなくなった地球、その1万年後を想像してみたいと思います。それは、あらゆる生物が生命を謳歌し全てが自然に包まれた緑の地球。これは原発を考えなければですが、そこは、まばゆいばかりの輝かしい世界になり、地球に残された人類の痕跡は、ほんのわずかしが残っていない、ということになると思います。地球から人類がいなくなるとどうなるか？その答えは、「地球は、失っていた全ての地球を取り戻し本来の姿に戻る」というシミュレーションになっています。必ずしも、そうはいかないと思いますが、地球が自然を取り戻すということは間違いはないかと思いますが、このように人間の歴史は地球に大きなダメージを与えています。では、その人間の歴史ということを改めて考えてみたいと思います。

2. 歴史にみる心と文化

第二部は、「歴史にみる心と文化」ということですが、導入で、3つのNHKの番組を紹介したいと思います。はじめは「地球生き物紀行」で佐賀平野のトンボとサカナをとらえたものです。トンボの生息というのが、特に佐賀平野、

あるいは地球環境の維持のために大事な存在であるということをお話しています。次に「クローズアップ現代」で「日本の森林が危ない」というテーマで、亡くなられた立松和平さんが出演されていました。森林の循環が必要である、雑木林が人の手が入るわけですが、ひとたび、人の手が入れば、その生態を維持していく責任がある、という番組でした。最後に「ふるさとの24時間図書館」という番組で、佐賀県唐津市で今でも農家をやりながら作家活動をされている山下惣一さんという農民作家が出演されていました。ここでは、地域の交流の場、失われていく伝統的な交流の場、そこで行われる祭りや井戸端会議や向こう三軒両隣といった地域住民のコミュニケーション活動について、その現状について触れる番組でした。

これら3つの番組から窺えるものとして、自然との共生、むしろ自然の営みとヒトの営みを融合した生態のあり方といえると思います。それから、日本列島人の生き方、信仰、世界観、里山の文化ですね。日本人には、他の国あるいは民族にはない独特の信仰、世界観、特に里山の文化というのを持っています。それから、文化の担い手、コミュニティ、集団、ヒトの社会ということで、どのようなものでも社会化されなければ文化にはならないということで、文化の担い手はコミュニティであり集団なのですが、個人が持っている限りでは文化ではなく、それが集団や社会で共有される中で初めて文化というものになっていくわけです。

難しい定義になりますが、文化とは「学問、信仰、芸術、倫理、法律、風習、そしてその他に、社会の一員として人間が身につける全ての能力と習慣からなる複合体である」ということです。文化というものは単純なものではないし、全て複合したものであり、文化というのは、私の言い方で「融通無碍」ですね。どのようにもありうる、なりうる、変化する、そういうものが文化であるといえると思います。そして、それは「ある一つの人々の集団が学習し、共有した行動様式であり、歴史という時間をかけて共有化されたヒト独自のもの」であります。ヒト独自のものというものは、人類以外には「歴史」というものは持っていません。ヒトに近いチンパンジーにしてもボノボにしても、あるいはゴリラにしても、「文化」や「歴史」というのを持っていません。ですから歴史と文化は、他の動物とは違った人間、ヒト社会が生きていく上での社会固有のプログラムである、ということでもあります。みなさんも生きていく上での計画というものがあるかと思いますが、その

日、その一週間、一ヶ月、一年と生活していく上での計画というのは、どこかであると思います。いや、そんなものはないよ、とおっしゃる方もいるかもしれませんが、必ず自分のプログラムがあり、一日、一週間、一ヶ月、一年を過ごしていると思います。そうしたプログラムというものは、他の動物にはないということでもあります。

3. カルチャー・ランド・スケープ



この写真は、山影でおおよそお分かりになるかとおもいますが、雲仙岳ですね。左に、ぼつと出ているのは、眉岳（眉山）ですね。眉岳は、江戸時代に大きな噴火があったときに、地震に伴って崩壊して、その影響で津波が熊本を襲ったということです。そして、雲がたなびいていますが、手前の海に出る川は、有明海に注ぐ矢部川の河口です。お手元の資料にも私の感想が書いてありますが、九州佐賀国際空港という大仰な名前ですが、小さな飛行場があります。私から見れば、飛行場らしい飛行場ですね。ここから飛行機が上空へ昇ったり、あるいは降りてくるときに、広い空に昇っていく、あるいは広い平地に降りていく、という感じが実感できる空港であります。さて、みなさんがご存知の佐賀県から福岡県にわたっての筑紫平野は、沖積平野としては日本で最も大きい平野に類すると思います。この熊本平野も含めて広い平野になるのではないかと思います。飛行機に乗って、徐々に上空に昇っていく間、写真を撮りながら、下のほうを眺めておりました。この有明海やその周囲に広がる筑紫平野というものが、どのようなものであったのだろうか？どのようにして、このような平野ができたのか？ということを考えて時があります。

まるで見てきたように申し上げますが、8万5千年ほど前に、(7万年前という人もいますが)阿蘇山が第4回目の大爆発をしました。このとき、雲仙・普賢岳の火砕流の

約 500 万倍といわれる極めて大規模な火砕流が発生しました。九州全土のみならず、本州の一部も覆い尽くしたと言われる大変な大爆発が阿蘇山であったわけです。この火砕流の堆積が、筑紫平野や有明海の海底のさらの下方に分厚く堆積しています。そして、数万年前から始まった海進によって、浅い海となりました。この筑紫平野や有明海は、8万5千年前はまだ陸地、浅い谷であったといわれ、そこに火砕流が厚く堆積したわけです。それから数万年の間に、周囲の山々が侵食されて、その上に被っていきます。あるいはまた火砕流の堆積を侵食して、あちこちに、我々が「火山灰ローム層」と呼んでいる丘陵が出来上がって行きました。吉野ヶ里遺跡は火山灰の堆積層が侵食されて形成された丘陵上にあります。

氷期が終わり間氷期という時期が来ると、北極と南極の氷が解けて、海が現在より 150~160 メートルほど高くなったと言われています。陸地であった火砕流の堆積した浅い谷に海が入ってきて、遠浅の海が出来ました。深い西の海から寄せる海が浅い海に流れ込むことで非常に潮位差が大きい有明海が形成されたわけです。日本で最大の潮の満ち引きがあると言われ、大きい時では 6 メートルほどの潮の干満差があります。



これは筑後川の河口付近です。この河口付近の沖積速度、いわば陸地になっていく速度は一説では年間 10 メートルと言われていました。私も佐賀に赴任したとき、ある本で書かれていて、そんな 10 メートルもないだろうと疑問に思っていたのですが、現在の筑後川の河口から 20 キロメートルほど奥に貝塚が点々とあります。言い換えれば、海に近い場所がそこまであったということになります。その貝塚は、今から 2000 年前ほどの弥生時代のもので、そうしますと、年間 10 メートルに 2000 年をかけると 20 キロメートルということで、考古学的に確かめることができて、

私も納得することができたわけです。こうした沖積作用が何故起きるのかと申しますと、普通は川から流れ出した土砂が堆積し広がっていくのが堆積作用です。しかし、有明海の場合は川から流れ出した土が堆積すると同時に流出した火山灰土が浮泥となって海に浮かんでいます。それらが満ち潮とともに陸のほうに押し戻され、引き潮とともに堆積していくわけです。ですから、特に江戸時代からの佐賀平野の農地造成、干拓の状況を見てみますと、海岸に沿って扇状に、搦（からみ）という地名が点々と帯状に残っています。これは何かというと、木の枝や葉をそこに置いて、満ち潮で戻された土がそこに引っかかって堆積していくわけで、自然の摂理を利用した干拓事業が行われていたわけです。佐賀藩は、額面 35 万石の大名でしたが、実質は 80 万石あったとも言われています。現在は、写真には写っておりませんが、海岸近くには海苔ひびの網等をたくさん見ることができます。これも遠浅の海を利用して、また川から流れ出す養分を利用した海苔栽培が行われているわけです。この平野を見ていくと、まさにこの地域は基盤目のように走る水田がありますが、長い歴史の中で人と自然との関係で作上げた歴史的文化的景観というふうにいえると思います。それをもって、カルチャー・ランド・スケープ、これがいわば日本の基本的な文化を生み出した大きな力であったことが分かります。

雲仙岳は、佐賀県から福岡県の筑紫平野の人たちにとっては、自分たちの生活の場所を知るランドマークであります。この方向に雲仙岳があるということは自分たちが住んでいる場所を認識するという話をあるところでしましたら、熊本からも見えますと言われ、なるほどと思いました。有明海は不知火海を抜けて外海にも出るわけですが交通の要所でもあります。

象徴的な土地の言葉として、柳川出身の北原白秋という有名な詩人が、韓国の詩人たちが民謡集（『朝鮮民謡選』）を出版したときに、巻頭に序文を書いています。それを読むと「自分は柳川出身なので東京よりも朝鮮（韓）をより身近に感じていた。柳川には、鯨鯨組という漁労集団があって、春と秋には小船を操って、五島列島を経て、現在の韓国の釜山に稼ぎに行っていた」と書いてあります。有明海から大陸や韓国に行くには、玄界灘を経て回り込んで行くような地域にみえますが、決してそうではなく、潮の干満の大きさを利用するなどして水運が非常に盛んであったわけです。



この写真は、有明海と筑紫平野の写真ですが、約 3000 年前から沖積作用が急速に進んできたタイミングと合わせたかのように、2500 年前から大陸から稲作の技術が伝わり、この地は日本農耕社会の揺籃の地となります。同時に在来人と渡来人が出会い、熊本平野や有明海の近い地域では初期の稲作の遺跡が見つかっています。また、有明海周辺の地域では、朝鮮半島から渡ってきた人たちが村を作って、稲作を広めていった状況も確認されています。そういうことでは、内海的な有明海、不知火海ではありますが、閉鎖的ではなくて、対外的な交流を大きく持っていた場所であったわけです。



見ていただければわかるかと思いますが、有明海、不知火海で、雲仙岳があり、筑紫平野や熊本平野からも良く見えます。背振山もあります。最近、宗像、沖ノ島、関連遺産群が世界遺産になって有名になり、みなさんもご存知かと思いますが、これらの海に祀られている神様がこの背振山の上に祀られています。特に大陸から航海して、こちらにやってくるときに、その目標が背振山でありました。航海は目標・目的があって進むもので漂流とは違い、おそらく大陸からちゃんとした航海の目的をもってやってきて

いたかと思いますが、この背振山が一番の目標にして、唐津や博多に帆船で到着したわけです。かつて日本丸の帆船の船長をされた方が、パリから帆船でやってきたときにまず目に付くのは背振山だと言っておりました。そういうことから見ても、これらの地域、有明海周辺も共有しながら、筑紫の国があるということが地図で分かるかと思います。



佐賀県の上峰町でびっくりするような発見がありました。この写真は樅の木的一种ですが、木材は直径2mほどあります。赤っぽい土が火砕流の堆積です。遺跡の発掘調査をしてところ、腐っていない生木が出てきました。発見当時、私も一緒にいましたが、幸い地下水の性質で残ったのだと思いますが、8万5千万年前に火砕流でなぎ倒された直径2mの樅の木です。この時に熊本大学の火山学者の方に調査をしてもらい、この木についている火砕流の傷から、この地域に、100km/hほどの火砕流が、しかも東の方から襲って来たということが分かりました。阿蘇山の方角は南ですので、何処から来たのかということになったのですが、一度、北のほう流れた火砕流が途中で西に方向を変えて襲ったということが分かりました。普賢岳の火砕流の約500万倍といわれても実感がわきませんが、米粒に例えますと、米500万粒というのは80kgの俵になります。米1粒を1メートルの上から頭に落としても、感じるのがやっとくらいかもしれませんが、80kgの俵を落としたりどうでしょうか。それだけ大変なエネルギーの火砕流が襲ったわけです。そして、この火砕流が先ほど申し上げたように、有明海という特異な環境を作り出したわけです。そこに営み、歴史を作った人たちがいて、形成されたのが、現在の歴史的文化景観といわれるものだと思います。

4. 環境と世界観

環境と世界観についてですが、環境から世界観が生まれてきます。信仰といってもいいかもしれません。環境には、地球の自然環境、そして人類が自然と関わりを持ちながら、生活を営む中で形成してきた生活環境、というものがある。この2つを考えておく必要があります。何も自然だけが環境を決定するのではなくて、人が関わりながら作ってきた環境もあります。これは日本の場合は、里山、里海というものであります。環境は同時に人の心をつくるものであります。自然と一体となって生活してきた人たちの心、世界観、信仰というものは、日本人の重要な精神構造の基礎的なものをつくっています。これは、自然と対決して文化をつくってきたヨーロッパと対比させられます。日本人の心、精神世界、世界観は、自然を「神」にする、あるいは自然に「靈魂」がある、靈的な力があると感じるものです。これは今日も日本人の精神構造の中に根強く残っています。これは必ずしもそうした例といえないかもしれませんが、野球選手が付けている首輪のような磁気バンドに、ピッチャーが投球する時にキスをしたり、バッターがバッターボックスに立つ時にキスをしたりしますが、自分に超自然的な力を与えられるという信仰があると思います。こうした信仰は、みなさまの中にもたくさんあると思います。たとえば、山の神様とか風の神様とか我々の世界には神様が満ち溢れている。そういうものと一体となって我々は生活をしているという感覚であります。そういうものを含めた環境、自然と一緒に作り上げてきた生活環境、これが歴史的産物であります。

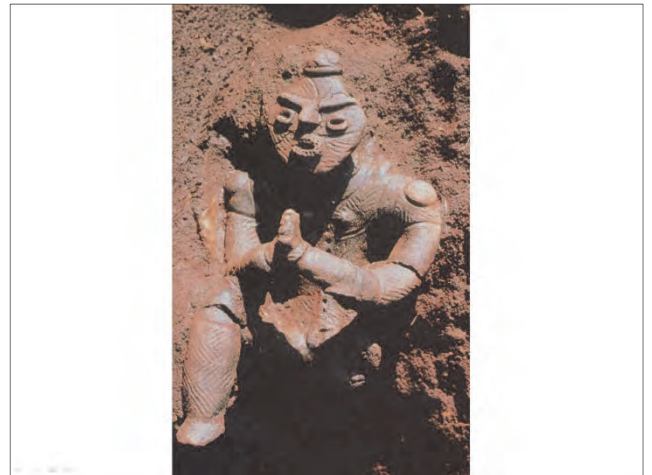
そこで我々の祖先というものを振り返ってみたいのですが、縄文人の世界観、これは精霊信仰が主体であります。精霊信仰というのは、万物に神々が宿るということであります。どのようなものにも、お箸にも茶碗にも草や川にも色々なものに神が存在する。それを時々、擬人化、人間のように位置付けることがあります。それが発達して、いろいろな神様になるわけです。そういうことでは精霊信仰というのは、日本人の根源的な精神、あるいは信仰であるといえると思います。縄文時代は、集落の中央の広場に墓を営んでいます。死者との共生と再生を祈るということで、中央のお祭りの広場に遺体を埋めております。それはどういうことかといいますと、東洋的と言ってもいいと思いますが、「魂魄(こんぱく)」という言葉があるのをみなさんもお存知かと思いますが、「魂」と「魄」ということで、これは一つのものではなく、二つの「たましい」を持ってい

ます。「魂」というたましいは、生きているときは「生」を司り、「魄」は「肉体」を司る。2つの「魂魄」があるというふうに認識しています。これはアジア人に共通ですが、日本人は特に強く意識していることです。ですから、人間は亡くなると、「魂」は来世に行く一方で、「魄」は死霊となって地上にとどまる、いわば遺体であります。しかし、その死霊は大事にしないと祟るので、自分たちの村の中央の広場に埋めて、常に「魄」と一緒に暮らすという村づくりをしたわけです。そして、時折、呼び返すこともするわけです。そろそろお盆ですが、呼べばやってくる。それにはいろいろな祭祀、儀式などがありますが、日本の神様というのは便利に出来ています。姿は見せないけど呼べばいつでもやってきてくれる、誰が呼んでも来てくれます。今は神主さんがその役目を果たしているわけですが、そういう神が、我々日本人の心の世界に存在しています。死霊に対する畏れと信仰、お墓を作って大事にするというの、大事にしないと死霊が祟ってくるわけです。たとえば、菅原道真は怨霊となって祟ったわけです。大宰府天満宮に祀られているわけですが、他に怨霊の祟りを恐れて、神代(神社)がつくられることがあります。これが発展して、江戸時代くらいになると、怨霊は幽霊として変化してくるわけです。遺体を大事にするということはヨーロッパにはあまりありません。

それから、自然の社会化ということで、草や木も太陽も東西南北、日が昇る方向にもいろいろな神々がいるということです。黄色人種にルーツをもつ人に似通ったところがあります。私は、ネイティブ・アメリカンの人たちの住居に訪問したことがあります。ほとんどの人は町に住んでいましたが、一部の人は、我々からみれば荒野と思われるところに家を作って住んでいました。ジョン・ウェインの「駅馬車」の舞台になるようなところなんです。なぜそのようなところに住んでいるのかというと、あちこちに自分たちの精霊がいるということで、その精霊と自分たちが一緒に住むことで精神的にも一番安定して生活が出来るということでした。そこで獲れるものはトウモロコシくらいのものだと思います。雨は降らないということでしたが、家の屋根の上には神々との交信をするために穴が開いていました。東は神様がやってくることが出来るように入り口として設けていました。最近ではアメリカという悪い精霊がやってくると言っていましたが、このように自然の神々を自分の社会の中に位置付けていくという世界は、縄文人が始めたことです。



いろいろな精霊があるかと思いますが、この写真は、人のような形をしています、多分精霊でしょう。精霊が土器のまわりに表現されています。ぐると周りに人物のような精霊が表現されています。精霊に守られている、あるいは精霊が寄り付く甕です。



この時期にはこのように座って、祈りのようなものを捧げる。女性ですから巫女さんですね。神の子、シャーマンです。こういう座り方は、皆さん、できなくなった人もいるかもしれませんが「しゃがみ座り」ですね。こういうしゃがみ方は、ヨーロッパ人にはできません。野球のメジャーリーグでも、キャッチャーがここまでお尻を落としません。日本人のキャッチャーはお尻を地面まで落とします。この座り方は「しゃがむ」としか表現できませんが、一時はコンビニの前でこういう若者がいましたが（会場笑）、この座り方は南のほうから島伝いで来たものだと考えられています。そういうところの椅子は低い椅子ですね。枕より低いです。高い椅子が出てくるといのは権力の出現と関係があります。



この写真は、日本列島の原植生と主な動物の分布を表したのですが、この写真で日本列島を見たときに、大きく生態が東日本と西日本で分かれています。最近では温暖化で変わってきましたが、西日本は昼も暗い常緑広葉樹で、東日本はブナ林などの明るい林で、植生だけでなく、東にはイノシシがいないなど住む動物も違います。それらを捕らえ、あるいは採集して食べる食文化にも違いがありました。

佐賀市の遺跡の例ですが、8000～9000 年くらい前の住居、お墓、ごみ捨て場、それからドングリなどを晒して食べられるようにする遺跡が出てきました。現在の地表から 5 メートルくらい下のものです。ここに大きな調整池ができるということで掘り下げて、初めて分かったのですが、クヌギ、イチイ、カシの木の葉のさらし場や貯蔵施設も出てきました。現在の有明海で採れる貝も出ており、動物、川魚、海魚も食べていました。鹿の髄も食べていた様です。焼石で料理をしていた可能性も考えられています。潟に近い場所に集落を形成しまして、その背後には雑木林があります。既に 9000 年前から里山・海里的な生活環境を形成していたことがこの遺跡でわかりました。

ところが 2500 年くらいに稲作が入ってきました。そうしますと、農業を背景にした世界観が入り込み、稲作の渡来とともに穀霊、作物に対する信仰が新たに成立してきました。それから世代を渡って農業を営んでいくことで、新たな祖霊信仰が生まれてきました。そして、祖霊信仰は、国、政治社会の成立とあいまって、支配的な思想となって行きました。

祖霊信仰というのは、父方か母方かは別として、特定の先行する世代の死者が系譜的に現世民に連なり、現世民の生活に強い影響を及ぼす観念のことをいいます。このあたりの時代から先祖への敬いが強くなってきます。たとえば、その国を作った祖先が社会的に大きく祀られるというこ

とで、その祀りに集まった人たちが集団をつくり、その集団を支配していく秩序・制度が作られていきました。



この写真は、その弥生時代の巫女さんです。熊本県でもたくさん出土しています。貝の腕輪を二十数本付けていますが、これは沖縄でしかとれないゴホウラ・イモ貝ですが、これをたくさん身につけて、貝の呪力を用いて、憑依、トランスして、神々から神託を得るわけです。紀元前 2 世紀頃は、巫女はまだ一般の墓に入っていましたが、多くの巫女が身分の高い人たちの墓に葬られるようになっていきました。こういう人たちが徐々に地位を高めていく様子が分かります。巫女の社会的地位が上がってきたのが紀元前 1 世紀のことです。それからどんどんと権威、力をつけてきて、ここで邪馬台国論をするつもりはありませんが、卑弥呼のような巫女(ふじょ)王、あるいはシャーマンの王が出現してくるわけです。その過程が、九州では的確に読み取ることが出来ます。



ここに二つの顔があって、われわれ流に言えば、右側の四角い顔が、西北九州型、南九州型で、同じく弥生人であり、左側の面長が北部九州、福岡、佐賀、熊本地域の人の顔であります。この人たちが、朝鮮半島か中国か

らの渡来系で稲作を伝えてきたのではないかと考えられています。これらのひとは、やがて4～5世紀になると在来人の中に混じっていて、その差は見られなくなります。

祖霊信仰について、吉野ヶ里環壕集落内の北位置に、歴代の王を葬った墳丘、人工的な盛り土があります。その前に社を建てて、柱を立てて、祀りをしていました。国づくりをした王が中央に埋葬されていますが、歴代の王も周りに埋葬されます。それらは死霊ですが、時々、魂に帰ってきてもらって、魂と魄が一緒になってもらう必要がありました。そこで巫女に託宣、神託を受けてもらうために、あの世に行っていた魂を呼び戻すために柱を立てました。これは今でも諏訪大社では「柱」を神様に表現しますし、靖国神社などで英霊を何柱というふうに言います。こうして、祖先、社会を統一した国作りをした人たちをおまつりするようになったのが弥生時代です。また、いろいろな稲の神様や邪霊を避けるために木の神を作って門の上に置いたりもしました。村の入口にこういうものを置いて、よそ様の悪霊や邪霊を避けるようなことも行われるようになりました。



人間のウンコの化石・糞石(奈良県唐古・鍵遺跡、弥生時代中期)

これは弥生人のうんこです。調べますと、いろいろな寄生虫の卵などが出てきます。回虫や鞭虫です。回虫は、食べ物から卵の状態で人体に入ってから寄生するわけですが、鞭虫は生魚に付いています。生魚を食べる習慣があったので、鞭虫の卵が体の中で孵って、また卵を産み、それがまた便となって出たわけです。弥生時代の人たちは、回虫にしても鞭虫にしても寄生されることで、かなりひどい貧血をおこしていた可能性があったといわれています。それから、植物性、動物性の食べ物を見ていきますと、炭素同位体比で分析すると、肉食動物、草食動物の間にヒトの分析値があるとのこと。ということは、我々日本人の祖先は、植物性、動物性の食物をバランスよく摂取して

いたことが分かります。この時期になると、交易がはじまり、日本列島だけでなく、おそらく海外からも取引に來ていたことが分かります。特に北部九州では、朝鮮半島や中国の文物がたくさん出土しています。

5. 吉野ヶ里遺跡について

ここで発掘調査した吉野ヶ里遺跡について紹介したいと思います。長細い丘陵ですが、幅が約600から700mあり、南北が5kmほどで火砕流が堆積が丘陵として残ったものです。この上に吉野ヶ里遺跡が形成されています。約300ヘクタールほど、住居や墓、壕など、いろいろな施設や遺物がたくさん出てまいります。その南側の端のほうに約40ヘクタールほどの壕を巡らした環壕集落が出てきました。これは発掘当時の様子です。このまま残すことは今日の技術では不可能なので埋め戻してその上に当時の復元をしています。この吉野ヶ里遺跡の歴史的意義を簡単に説明すると、日本最大の環壕集落ですが、それを置いても、国の政治、経済、信仰の中核的機能をもつ都(御家埴)のあるところ。偉い人の家のことを「みや」といいます。飛鳥時代までは、ある天皇が都を遷したという都市を遷したような印象ですが、実は自分たちが住んでいる館を遷したくらいです。都市計画的な都が作られるようになったのは藤原京からで、7世紀の終り頃です。それまでは天皇の屋敷が都であったわけです。

吉野ヶ里遺跡は、列島社会が、村から国へと発展する様子を段階的に追って説明できる遺跡であるといえます。紀元前3、4世紀から紀元後3世紀まで約700年間続いていた集落遺跡です。ですから、その間にどのように変化したのかをよく読みとれる遺跡であるといえます。こうした遺跡が他にはまだ発見されていません。そういう調査がされていませので、おそらく他にもあると思われますが、現在、吉野ヶ里遺跡が発見された唯一の例であり、村から国といった変化の様子がみることができます。そして、それが国の生成、確立、国が連合し、連合間の国の抗争を通じて、国家の生成へと向かう社会の激動を伝える遺跡であるということがいえます。そして、言い換えれば、魏志倭人伝の記述と符号する遺跡であります。

魏志倭人伝では、卑弥呼の住む館について、居所、宮室、楼観、城柵を厳重に巡らせ、常に武器を持って待っている人がいる、と書かれています。これとよく符号する各施設の配置関係が吉野ヶ里遺跡にはあります。そうしたことから、吉野ヶ里は邪馬台国ではないかという方も出てきたわ

けですけれども、このように魏志倭人伝と符合する遺跡が発見されたのは、まだ吉野ヶ里だけで、他の遺跡では発見されていません。そんな段階では邪馬台国とは断定的なことはいえません。魏志倭人伝の時代の一つの国の都の様子が明らかになったという意義は大きいと思います。このことは現在も続けられている邪馬台国論争にも大きな影響を与え続けています。私は、九州説の旗頭に無理やりさせられていますが、何か奈良の方で発見があると、新聞社やテレビがコメントを求めてきます。そろそろ屈服しませんかというわけです。屈服したくても、中々それだけの発見ではないのではないかという話で押し返します。ある奈良に住んでいた先輩からは「邪馬台国九州説絶滅危惧種」と言われたりしましたが、最近では絶滅危惧種には保護の手が加わってまた新たに再生しつつあります、と返しています。まだまだこれは決着が付きませんが、具体的な遺跡の上で議論されるようになった意義は大きいものがあると思います。

吉野ヶ里遺跡で注目すべきは、当時の人たちの世界観の一部であります。ここに図面を出していますが、これが壕の跡です。実際は壕がずっとあって、まだ発掘されていませんが、その中に二重の壕で囲まれた地域があり、他にもいろいろな施設、歴代の王の墓、祭壇があります。住居の跡もたくさんあります。王の墓と祭壇はほぼ南北に配置されています。これは、都市的な集落を作る基準線になっていると思われます。信仰上の基準線となっていて、我々は「聖なる基準線」と呼んでいます。それに沿って、いろいろな施設が作られています。これは何時の時代にも見られることで、中国では、北が上位で南は下位と、これは中国の前漢時代からあるものですが、この吉野ヶ里ではその影響があったのではないかと思います。そして、この基準線の延長戦上に雲仙普賢岳があります。火を吹く山、南の方向にありますので、火の鳥である「朱雀」という意識が既にあるということがいえます。そして、ここに馬の蹄の形のような北内郭跡がありますが、この軸線が、夏至の日の出と冬至の日の入りの線になります。ということは、夏至、冬至というものを十分に組み込んだ生活、暦を作っていた可能性があります。



これは巫女さんの神懸りの様子を再現したものです。こうした集落を復元しました。全部で建物が 99 棟を復元しました。発掘した遺構から見ると、そのまま復元すれば皆同じ建物になります。けれども、当時の人たちの信仰、世界観を我々は可能な限り追求しました。そうした中で、色々な場所にある建物のデザインを考えて復元しています。

6. 神話は絶えず生成される

当時の人たちの世界観、神話というものは実体のない物語ですが、神話には、いろいろな意味があります。神話とは世界の人類がいかにして現在の姿となったのかを説明する象徴的な物語です。あるいは、神話が述べる出来事は不可思議であるのですが、社会の規範として従わなければならないものとして意義付けられていたといえます。こうした祖先がいることで私達祖先の生活があり、その規範はしっかり守らなければならなかったのです。りません。神話の国で有名な出雲の国ですが、出雲の国の建国者は大国主命です。国の中には、それぞれの郡、小さな国にその土地の独自の祖先神がいます。それが中央で編纂される際に抹殺されていきました。大和の祖先神だけが頂点にいる神話が作られたわけです。もともと、各地の国々に祖先神がいたことは間違いのないと思います。九州筑紫も肥前、肥後も独自の建国や国生みの神話の体系をもっていたと思います。これは残っている九州の神話の端々からも読み取ることができます。かつての吉野ヶ里にも、国生みの神話があったといえます。どのような神話であったのか、言い換えれば彼らの世界観を窺い知ることからはじめて、私達は歴史公園として「吉野ヶ里国」の首都の威容の復元が可能となったと言ってもいいと思います。ただ、機械的に出てきた建物の跡に合わせて、住居や建物や堀を作ったわけで

はありません。神話は国作りのプログラムであります。そういうものは改めて作られていくこともあります。民族というのも新たに生成されているとも言われています。カナダのフランス系の移民の人たちは、ケベックとして、自分たちを独自の民族として位置付けています。

吉野ヶ里遺跡の環境と植生ですが、暖温帯の広葉樹があって、アカガシ、シイ、クス、モミ、コナラ、クリ、ケヤキ、モチ、ユズリハなどにイメージされる植生があり、これらを可能な限り、吉野ヶ里遺跡でも再現しています。食性は、魚貝などの海生生物、シカ、イノシシ、ムササビなどの陸上動物、シイ、クルミ、ドングリなどの植物性食品、コメ、アワ、そば、小豆、メロンなどの栽培植物となっています。吉野ヶ里遺跡の一角で祭祀に使った壺の中から供物が発見されました。貝やヘビ、ネズミなどがありました。

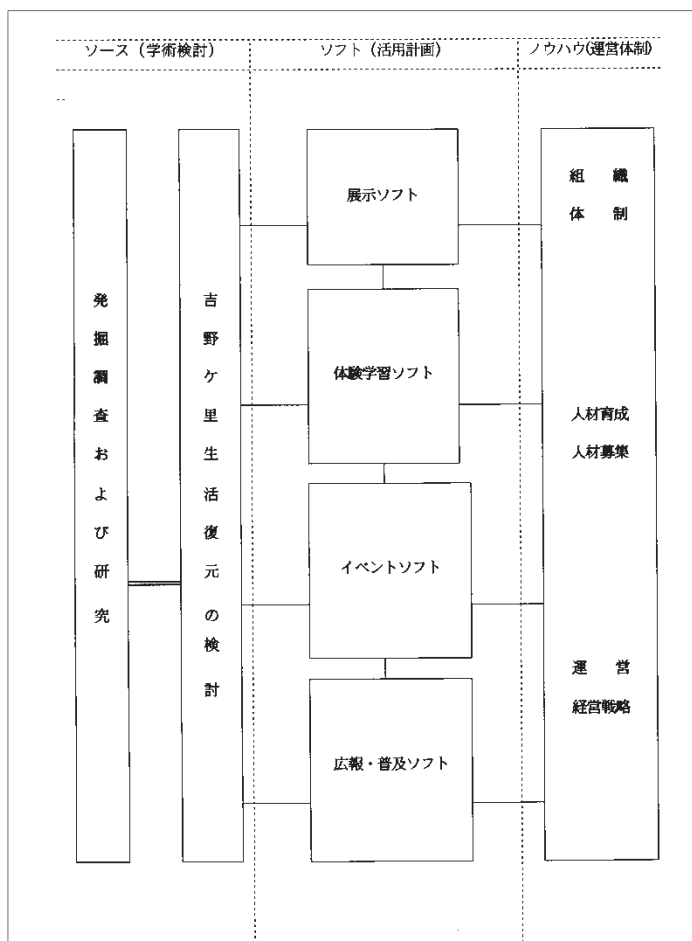
吉野ヶ里が弥生人によって開発される過程をみると、徐々に山が開かれていきます。そして、この時期の食のあり方で、魏志倭人伝では「飲食するに籩豆（へんとう、高坏）を用い、手食す。」と書かれています。現在は、箸やスプーンなどが使われていますが、その歴史は浅いものでして、日本人が箸を使い始めるのは、奈良時代の上の階層の人々からで、庶民はもっと後の時代になります。それ以前は、手で食べていました。皆さんの言葉の中で「食指が動く」という言葉は、その時代の記憶であります。現在の日本人の食事のとり方は、弥生時代から来ているといえます。「いただきます」というのは、神々への感謝を表す言葉であります。共食、みんなで食べる、手食と個人食器がその特徴といえます。日本人ほど個人食器に拘る民族はほかにいません。箸、茶碗、皿など、こうした個人食器は弥生時代からの伝統です。中国の人に「マイ箸」をプレゼントしたら怪訝そうな顔をしていました。それから、生食です。先ほど言いましたが、弥生人は鞭虫に悩んだということです。ですから、こういうところから、日本人の食事のルーツは弥生時代にあったといえます。

7. まとめにかえて-昔はよかった！？-

さて、こうした歴史遺産の活用に関して、戦略というものが必要であります。それは、市民生活の中の社会での位置づけ、市民にとってどのような意義があるのか、どのように扱うか、どのように市民に提供するか、市民がどのように享受するか、どのような成果が期待できるか。これらは歴史遺産だけでなく、行政が設けるいろいろな施策に言えることだろうと思います。歴史遺産・遺跡にどのような

魅力があるかといいますと、第一に学術的な価値です。先ほど吉野ヶ里遺跡を通して申し上げたことです。第二は、市民が遺跡からの情報を通じて、自分なりの推理ができるということです。たとえば、自分なりの邪馬台国論がそうです。第三は、全国で遺跡の発掘調査や研究がいろいろな形で継続する中、市民が遺跡からの情報を常に受信、発信できるということです。第四は、遺跡が周辺の田園、自然と一体となって、固有の風土を形成し、現代人の心と体にとって快適な空間となる、こうした魅力があるといえます。

遺跡の保存と活用にとって大事なのは、「守る」、「創る」、「生かす」ということです。「守る」は、まずは遺跡の保存が第一で、「創る」は、きちっと市民に提供できるような施設整備が必要であります。それから、「生かす」は、それを生かした活用、体験学習など市民が参加できるいろいろな催し物ができるなどの活用であります。そういう遺跡の魅力、あるいは地域の魅力といってもいいですが、そうした魅力を出すための七か条というのを考えてみました。まずは、「好奇心」です。我々は、常に好奇心を持っています。それから、体と心、そして情で見る。視覚、嗅覚、聴覚、触覚、味覚、第六感を含めて、その地域、遺跡を見るということです。それから、その遺跡を観る、地域の歴史を観る、それから風土として観る、自分が絵や地図にして観るということが大事です。そうすると何かその地域のイメージが見えてきます。それから感じたままを大事にしながら、一方では冷静に観ることですね。よく邪馬台国論にありますが、自分が発掘したところ、自分が住んでいるところが邪馬台国だと言っている方が結構いらっしやいます。そういうのではなくて、もう少し冷静に見ると、もっと他にもいろいろな邪馬台国があるのではないかと思います。それから、「良いところ、好いところ、善いところ」ですね。良いところにもいろいろな見方があるということです。それから最近、遺跡活用と地域社会ということで、遺跡が地域づくりの基本的な資源になるということです。それから計画は施設整備とともに活用、運営プログラムの策定が必要です。ただ整備すれば、勝手にみんな使ってくれるだろうというのではなくて、これをどのように活用するのかというプログラムが必要です。それには市民の参入、参加、参画が遺跡の活用、整備の成否を問うことになってくるということです。魅力ある遺跡の活用の3つの条件として、真剣に努力する人、遺跡の個性、特徴を把握すること、遺跡活用・整備の目的をもっていくということです。目的、目標無しでは計画にはなりません。



これは今日作ってみたのですが、学術的価値として根源的なものです。活用計画ということでソフトを創る。どのような運営体制なのか、ということが必要であります。そうすることで遺跡自身が有効に活用されることになります。よく「昔は良かった」と、研究者の中には、縄文時代は戦争がなかった、平和だったと、では縄文時代に帰ればいいじゃないかというわけにはいきません。そういうことではなくて、しっかり歴史を見るということが必要であります。

これで私の話を終わらせていただきたいと思います。